

Wizardry

試読・体験版

迷宮闇夢

The underground labyrinth

Dark dreams

Adult content

NOVELS

テキスト ～ 蛙雷

表紙・本文挿絵 ～ エナジー

本文挿絵 ～ C・モンキー

カエルの御宿

Wizardry ～ 迷宮闇夢 ～

登場人物紹介

(character)

迷宮無残乃章



セリア～

エルフのレベル1の僧侶(善)

細身と言うよりは貧弱で幼い体つき、御世辞にも美しいと言えない顔の造り……

しかもそばかすまじりの顔には、眼鏡もかけている。髪の毛は一応金髪だが、どこかくすんだ様な色合いで、くしゃくしゃな癖毛……と言う。通常のエルフとはかなり違う外見からのコンプレックス故に、故郷であるエルフの里より逃げる様にして、トレボー王が支配する城塞都市へとやってきたエルフの少女

トレボー王によるアミエレット奪還の告知を知り、冒険者を目指す事となり、同時に訓練所で出会った人間のザインと深く愛し合うようになる。

そしてザインを始めとして、同じ訓練所の仲間と共にパーティーを組んで、初めての迷宮探査へと向う事となるが、想像すらしなかった異常事態によりパーティーは壊滅してしまう。

セリアを逃がすために踏み止まったザイン、そのザインのもとへと駆け戻るセリアが眼にしたのは……

Wizardry ～ 迷宮闇夢 ～

登場人物紹介

(character)

迷宮闇夢乃章



シャリアとシャリス～

双子のエルフの少女、姉のシャリアはレベル12の僧侶(善)、妹のシャリスはレベル12の魔法使い(中立)、外見はほとんど同じ容姿をしており、唯一区別をつける事が出来るのは、頭髪の色が違う点だけである

(姉のシャリアは金髪、妹のシャリスは銀髪)



迷宮の中で偶然に見つけ出した玄室に、仲間のパーティー

共々侵入をはたすが、玄室にいた怪物によってパーティーは瞬時に壊滅状態となり、生き残ったシャリアとシャリス、そして盗賊の娘は逃走を図る。

しかし逃走は叶わず怪物に囚われの身となってしまう、盗賊の娘は陵辱の末に惨殺され、と姉のシャリアも陰惨で酸鼻な陵辱をその身に請ける事となる……

盗賊の娘～

シャリスとシャリアのパーティーに加わった人間のレベル9の盗賊(中立)

まだ少女と呼べるほどに若い娘であったが、怪物に凄惨な陵辱の末に惨殺されてしまう……

目次

第壹話

迷宮無残

5ページ

閑話

迷宮艶夢

81ページ

第貳話

迷宮闇夢

95ページ

テキスト 蛙雷

表紙・本文挿絵 エナジー

本文挿絵 C・モンキー

迷宮無殘



序章 【 迷宮の闇 】

迷宮の闇は暗く深い……地下一層よりも、地下二層が、そして更に地下三層へと階が深くなれば深くなるほどに、闇と混沌は色濃くなっていき、漂う瘴気もまた濃密になって行く、そしてそこに潜む怪物、魔物、悪魔……存在する全てが、強さと凶悪さを増して行く、それは地獄へと続く回廊と呼べる代物であったが、不思議な事に下層に存在する強力な魔物達は、決して上層の階には出現せず、その強さに従うかのごとく、地下迷宮の特定の階層にのみ、その身を潜ませていた。それは、まるで地下迷宮を探索する冒険者達のレベルに合わせるかのようにであり、ある意味で言えば、このワードナーの迷宮における最大の謎の一つであった。

★
☆
★

それは欲望であった。

それは飢えであった。

それは渴望であった。

そして我は気がついた。

そう……それに気がついたのは、この我だけであった。

遙かな地下迷宮の奥深く、最下層の地下第十層においても、その魔力の強さはもとより、強靱な体躯と性の凶悪さと狡猾さは、迷宮の主人にして尊大なる大魔導師ワードナーと、その忠実なる下僕たるバン・パイア・ロードを除けば、迷宮にて一番の実力を持つ我だからこそ気がつき得た事であった。

日の合、月の合、星の合……そして天の合、地の合、刻の合……その他、幾つもの合が複雑に絡み合い、重なり合い、万分の壺……否！ 億分の壺の偶然により、我を！ 魔界の王たる我を！ 異界の魔神たる我を！ その魔力の強さゆえに、地下迷宮の最下層より這い出る事が適わず、我を閉じ込め続けていた因果が消え去った事に、我は

気がついたのだ！

我は、笑う……その、他の者どもが見れば、恐れ慄くであろう歪んだ相貌に、その表情の無い顔に笑みを浮かべながら想像する。

我が地下迷宮より解き放たれ、我の力を縛り付ける因果の鎖が断ち切れ、我の力の全てを、地上に解き放ち、思う様に振るえる様を……我の持つ力の万分の壱を……この忌わしき迷宮内にては、抑えられている本来の力を存分に奮い、思う様に破壊と殺戮に酔いしれる我の姿を、羽虫にすら劣る無力なる愚人どもの断末魔、踏みにじり蹂躪される者達の怨嗟の呻き声を想像し、それらによつて満たされる我の姿を……

『カアハア……』

歓喜の欲望が音となり、我の引き攣れた口より放たれと同時に、我は我の力を地上世界で思う様に奮うために、地下迷宮の主人たる大魔導師ワードナーにより定められている地下迷宮最下層より、蹂躪すべき命の満ちた地上の世界に、我を移動させようとした。

『ガア……グウウガア！』

しかし我は気がつく……我の自由を妨げる因果が完全に消え去ってない事に！

我をこの迷宮最下層に閉じ込めていた因果は消え去り、上層の階へと自由に行く事



は可能であることは確かであった。しかし、更にその外に、地上の世界に行くためには、別の系統の因果が我を阻んでいる事を知る。つまり、迷宮内部は合により消え去った因果により、自由に移動可能なのだが、迷宮の外、地上世界に赴く事は不可能であった。

我は怒り狂う。我が持つ……魔族が持つ、本能とも言える破壊と殺戮の欲望と渴望を、なまじ存分に奮え味わえると思っただけに、暗く、深く、どす黒い、人外の残酷な思考が、怒りと失望のために一層、濁りを煮えたぎらせて行つた。

その時に、我は感知した。人の持つあらゆる感覚を遙かに凌ぐ五感と、人が持ち得ぬ超感覚が迷宮の上層に愚かなる冒険者達がいる事を……そう迷宮の内部ならば、暫くの刻の間、我は自在に動き回れるのだ。そう……合が終わるまでの刻までは……

私の欲望を……私の渴望を……その満たされぬ思いを、少しでも満たす手段を見つけ出した事に、歓喜しつつ……我は笑う……その鬼面に笑みを形作りながら、我は呪文を唱える。

『……マロール！（転移）』

私の姿は、最下層の闇と瘴気を纏いつかせながら、異なる空間へと消え去つた。



最下層の玄室にて、水晶球に写し出された一部始終を見ている黒き影が存在している。

そして、その黒き影に寄り添うようにしながら、脇に控えている真紫の礼装に身を包み、跪いている青白い影が一つ……

「よろしいので、わが主よ」

「捨て置け……ヴァンパイア・ロードよ」

跪いている影の主、ヴァンパイア・ロードが、少しだけ……その人外の美貌に形作られて相貌に、憂いとも不満と言うにも、まだまだ不足を感じる表情を微か形作りながら、異なる言葉を口にする。

「されど我が主よ……」

「よい、この世界には、偶然と言う必然が存在する。いま、この時に合が消え去り、あやつが上層の階に向いたのも、糸つぐむ運命の必然……この運命の小波が、どのような揺らぎを見せるか、どのように回り続ける糸車に影響を与えて、このワードナー

の前に如何様な形をとって現れるか……それも楽しみな事であらうて……」

ヴァンパイア・ロードは、それ以上の異なる言葉を放つ事無く、傳いたまま闇の中に溶け込むように消えて行く……しかし、消え去りながらも、新たな言を発する。

「御意……わが主よ……しかし、念の為にフラックの奴めを、あやつの監視として送る事だけは、御許し下さいませ」

水晶球を見つめたままワードナーが、胸に飾られたペンダントに触れる……そして淡い光が、ワードナーを中心に広がり……そして静まる……それが何かの合図でもあったのだろうか？

「御意……」

跪いたままくヴァンパイア・ロードが闇の中に完全に消え去って行く……後には水晶球を見つめるワードナーだけが残される。

「マイルフィクスの奴め、想像以上に面白い動きを見せてくれおるわ……」

迷宮最下層、玄室の薄闇の中で、ワードナーは笑みを浮かべる。その笑みが、如何様な意味を持ちうるのか、当のワードナー以外には、誰も知り得ぬ笑みであった……いや、当のワードナーにすら、笑みを浮かべたわけを完全に知る事は無かったのかも知れない……



第一章 【セリアとザイン】

直立したまま眠りに陥ったオークが、無防備な姿を曝け出していた。

そしてその無防備なオークへと、間髪を入れずに鎧に身を固めた侍の剣が、その腹へと減り込む！

「ブギヤウウ！」

腹を割かれたオークが激痛によって、絶叫を発しながら眠りから目を覚めますが、それは断末魔の声にしかならなかった。

「ヒギユツ！」

別のオークが、似た様な断末魔の叫び声を上げて、その場に崩れ落ちる。二人の戦士が、絶妙のタイミングで切りかかり、眠り込んだままであったオークは、その剣先を避ける事すら出来ずに、胸と首を同時に切り裂かれ絶命したのだ。

これで二匹のオークが倒れる。

魔法使いが放った眠りの呪文であるカティノによって、六匹のオークの群れの内、

前列にいた三匹中、二匹のオークは眠り込み、無防備なままに前列に居た侍と戦士によって切り倒された。

「グウギユウラアア——！」

だが、カティノが効かなかった残る一匹は、戦士と侍が二匹のオークを切り倒す間隙を突き、後方にいる僧侶へと、威嚇の絶叫を張り上げながら突進していく！

恐怖の為か、僧侶は凍りついたように呆然と立ったまま身動きも出来ない、立ち尽くす僧侶にオークの錆びついた剣が振り下ろされる寸前、最初にオークを倒した侍が、オークと僧侶の間にその身を強引に滑り込ませ、僧侶を庇うかのように、オークの剣を自らの剣で受けとめる。しかし剣の勢いを完全には殺せず、流れたオークの剣先が侍の腕を抉り傷を負わせた。

オークが再度、侍に一撃を加えようとするが、剣を振り上げたオークの背に、盗賊が持っていた短剣を投げつける。ほとんど意味の無い、ダメージを与えられない攻撃であったが、オークに一瞬の隙が出来る。

「ガアハア！」

威嚇の声を出し、振り返ろうとしたオークへと、態勢を整えた戦士の一撃が振り下ろされ、オークは他の二匹のオークと同様に血溜り中に絶命した。

体勢を整えた冒険者達のパーティーは、再び生き残りの三匹のオークと対峙するが、もはや勝目が無いと覚った生き残りのオーク達は、さんを乱して逃走し始め、戦闘はあっけなく終結した。

「ザイン！」

腕を負傷した待に、助けられた僧侶がかけよる。その声は若い女の声であった。

「ごめんなさい、ザイン大丈夫？ いまディオスを唱えるから、待っていて」

女僧侶がディオス（レベル1の治療呪文で軽度の治癒効果を發揮する）の呪文を唱えるのと同時に、淡い輝きが傷口を包み込みながら広がり、やがて消えて行く……しかし光が収まった後の傷口は、完全には治癒されていなかった。

治りきらない傷口とザインと呼ばれた待の顔を、泣きそうな顔で交互に見ながら女僧侶が再び、ディオスの呪文を唱えた。そんな女僧侶の傍に近寄ってきたエルフの魔法使いが、女僧侶に向かって責めるような冷ややかな口調で言う。

「セリアさん、今のは貴方のミスですよ。同じエルフ族としても、恥ずかしいですね」セリアと呼ばれたエルフの女僧侶にはわかっていた。先ほどのオークとの戦闘において自分が犯したミスを……地下迷宮の怪物達との初めての戦闘、その恐怖のために

戦闘を補助する呪文を唱える事すら出来ず、そればかりか自分に迫り来るオークの剣から、身を守る事も満足に出来なかった。もしザインが庇ってくれなければ、自分はオークの剣を受けて死んでいたであろう事を……

「ごめんなさい、シヴァ……ゴステロ……バグー……スラツシュ……」

セリアは、俯いたままパーティーのメンバーに謝る。エルフ族の魔法使いシヴァ、ドワーフ族の戦士ゴステロとバグー、人族の盗賊スラツシュ……そして……

「……ザイン……」

人族の侍ザインに……

「気にするな、俺は生きている」

ザインと呼ばれた侍が、セリアに笑いかける。その笑顔は迷宮の闇の中にあつてさえ、陽の光を思い起こさせるような、明るく優しく、そして暖かな笑顔であった。

「ふー、相変わらずセリアには甘いですね、ザイン？」

呆れたような、それでいてどこか嬉しと言うか、楽しそうな口調で、シヴァはザインを見ながら言う。

「なんの……初めての迷宮、初めての戦闘、負傷したのが俺だけだったと言うのは上出来さ、それに前衛の者が後衛の者を守るのは戦いの基本だ。そしてセリアは、こう

してちゃんと俺の治療をしてきている。僧侶としての役目は充分に果たしてるさ、なっ！ みんな、そうだろう？」

ザインの言葉にシヴァは、何か言おうとしたが、その言葉を途中で飲み込み、苦笑を浮かべるに留める。そして後方でニヤニヤと笑いながら、そのやり取りを見ていた他のメンバーに向けて、おどけたように肩をすくめて見せる。

「ザイン、ごめんなさい……」

セリアが再び、ザインにあやまる。再び唱えられたディオスにより、完全に癒された方の手をザインはセリアの頭におき、そのままセリアのクセのある、やわらかな金髪をクシヤクシヤと掻き回すようにしながら頭を撫でる。もう気にするなと温かなザインの手は、そう言っていた。しかし頭を撫でられながらセリアは思う……自分の事……ザインの事を……

★
☆
★

セリアは思う……小さな頃から自分は鬼子だったと、そしてチラリと同族たるエルフのシヴァの方を見る。エルフ族の特徴を体現しているシヴァの姿を……細身な身体

でいながら均整のとれた身体づくり、造形美の極致を思い起こさせる顔、流れるような綺麗な金髪、優雅とさえ言える身のこなし、それらがバランス良く整い、妖しいまでの美しさを溢れさせている。それは個体的な差は多少あれど、エルフ族に共通した美の特徴と言えるだろう。

それに比べて自分は、どうであろうか？ おなじエルフ族だと言うのに、細身と言うよりは貧弱と言う体つき、御世辞にも美しいと言えない顔の造り……しかもそばかす交じりの顔には、眼鏡もかけているし、髪の毛の色こそ一応金髪だが、どこかくすんだ様な色合いで、くしゃくしゃな癖毛……全てに置いて優雅さとはまるで縁がなく、およそエルフ族らしくない自分の容姿……

故郷の森に居たときから、なぜ自分は他のエルフ達と、こころも違うのだろうかと考え、悩んで……母に対して、問い質した事すらあったが、母は何も言わずに、私を抱きしめるだけであり、それ以上の事を聞く事は出来なかった……

やがて……その事に耐え切れなくなった私は十五の春に、泣いて止める母を振り切り、逃げ出すように故郷のエルフの森を飛び出した。

そして、私はこの狂王トレポーの城塞都市に辿り着く、初めての大都市、溢れかえる人々の群れ……人間族、エルフ族、ドワーフ族、ホビット族、ノーム族……故郷の

森では、見た事もない雑多な種族の人々、その喧騒の中で、私は生まれて初めての安らぎを感じた。

トレボーの城塞都市に来て、数ヶ月の日々が過ぎ去る……職を見つけ日々の生活を過ごして行く私、ようやくに城塞都市の生活にも慣れ始めたころ、トレボー王の告知が出される。

『地下迷宮の奥にひそむ、魔法使いワードナーを倒しアミュレットを奪回せよ……その暁にはへ名誉と富へその双方が与えられるであろう』

私は、その告知を知った時に、迷う事無く冒険者を目指した。それは、自分に対するコンプレックスの裏返し、何か凄い事をして他人に、自分と言う存在を認めさせたかったからである。

適性検査の結果、幸いに私には、僧侶としての素質があった。そして始まる訓練場での鍛錬の日々、いくら素質があるとはいえ、冒険者としては素人である私には、厳しくも辛い修行の毎日であったが、その中で人間族の侍『ザイン』に私は出会う事となる。

人族の男性であるザイン……元々は、それなりの高レベルの戦士であったが、上級



職である侍に転職したばかりで、レベル1になった勘を取り戻す為にと、迷宮に入る前の訓練を兼ねて、訓練所に出入りをしていた。

そんなザインとの最初の出会いは最悪だった……私の事をホビット族と間違えて声をかけてきて、エルフだと言ったら声を立てて大笑いをしたのだ……

「ばかあああ！」

次の瞬間、パーーン！　と言う、小気味良い音と共に、私の平手がザインのほっぺたに命中し、目を白黒させているザインの姿があった。

それから、ほとんど腐れ縁……出会う度に（何故かしよっちゅう出会ってばかりいた……）大喧嘩ばかり（大抵は、ザインの方から仕掛けてきた……玉に私からだったりもしたけど……）をしていたザインと私、それでも何時の間にか、一番の仲間として何でも話せる友人になっており……気がつけば、私はザインの姿を何時も追い求めている事に気がつく……気がついてしまう……そして私とザインは……何時しか、お互いを特別な存在として意識するようになっていた。

ザインは不思議な人だった……既に侍として（レベルこそ1だが）、迷宮に赴く資格を得た冒険者となっているザインであったが、いまだに迷宮に入る事なく、暇さえあれば訓練所へと顔を出し続けていた……まるで誰かを待つように……

そして私が、訓練場での最後の訓練を終え、明日からは一人の冒険者として、ギルガメシユの酒場で仲間を集い、迷宮の闇を日常とする日々が始まるという日、ザインに私は呼び出された。

訓練場の外れ、雑草が生い茂るばかりの場所、二人がよく話をする場所……ザインは、何時もの彼らしくもない、何か迷うような表情を浮かべながら……それゆえに、真剣な口調で言う。

「冒険者になるのを……やめないか？ セリア……」と

ザインが何を言いたいのか解る。自分でも能力は別として、冒険者の資質と言うのか、その本質において、何か足りない事に気が付いていた。それでも私は、ザインの顔を真直ぐに見て言う。

「彼方の傍に、彼方と一緒にいたいのに！」

漠然とした目標で冒険者となった私だったが、何時の間にか一つの目的が出来上がっていた……それはザインと一緒に、ザインの傍に居たいと言う気持ち……

私の言葉を聞いたザインは、何か言おうとしたけど、私はザインが何かを言う前に、ザインに抱きつくようにして、自分の唇をザインの唇にかさねる……ほんの一瞬だったかもしれない、息が苦しくなるほどに長かったかも知れない……ザインも私の身体

を強く抱き返してくれている。

そんな私とザイン……二人は抱きあい、草の中に倒れ込こんだまま動かない、私も身を任したまま動かない……、

「守ってやるよ……」

離された私の唇とザインの唇……ザインは呟くように言う……私は知っていた……ザインが何故、迷宮に入る事をしなかったのかを……

「守ってやる！」

今度は、大きな声でザインは言う……ザインは待っていてくれたのだ……私が冒険者となつて、迷宮に挑む時が来るのを……

「ザイン……」

私は、小さな声で囁くように言う。

「耳元で、あまり大きな声出さないで、私……耳が大きいから、耳がおかしくなつちやう」

ザインが、弾けた様に笑い出す。私も一緒に笑う。ザインの温もりを身体全体に感じながら……

「ザイン……」

私はザインの目を見つめる。そして……自分の方から、再び唇を重ね合わせた。

★ ☆ ★

城塞都市に幾つか在る旅籠、ある特定の目的の為に存在している旅籠であり、そんな旅籠の一室に私とザインは居た。

「え……と、あの……その……なんでもないから……」

既に湯浴みも終えた……そのままの姿で……裸の身体に、シーツを巻きつけたと言う格好で、私と一緒にベッドに並んで座っているザインに、何か言おうとしたけど、何を言えば良いのか、なんと言えば良いのか、それを思いつく事ができずに、先程から何度も同じ言葉を口に出しては、最後まで言う事無く口を閉ざすと言う事を繰り返していた。

そして……沈黙……だけどザインの手が、私が身に着けていたシーツに触れ、巻きついているシーツを、ゆっくりと解放して行く……

「あっ……あの……」

驚いて私は、ザインの顔を見るが、ザインは困ったような表情で私を見返す……

「ううん……なんでもない……」

ザインの手によって、シーツは優しく巻き取られ……私のすべてが、ザインの目の前に投げ出される。

「ザイン……」

ザインの手が私の胸の上に置かれ、私の小さな乳房をすっぽりと覆い隠す。乳房に置かれた掌から伝わってくるザインの温もり……だが、乳房に置かれたザインの掌の動きが止まり、そのままピクリとも動かなくなる。

「どうしたの、ザイン……」

不安になり、思わず問いかける……そして、私は自分の身体を恥じてしまう。

「ごめんね、ちいちゃくて……胸が……」

膨らみの少ない私の乳房、そんな私の胸にザインは失望してしまっただ……そう思ってしまう。だが乳房の上に置かれていた掌が、ゆっくりと……ぎこちなく動き始め、私の胸を優しく揉み始める……そして……

「いや、なんだか力を入れて胸を揉んだら、セリアを壊してしまいそうで……あの、痛くないか？ 大丈夫か？」

どこか不安そうなザインの言葉が返ってくる。

「ばか！ 女の子はね、好きな人を受け入れる事が出来るの！」

自分で思わず赤面してしまう様な私の言葉、嬉しさと恥かしきの余りに、そのまま
プイツと横を向いてしまう。

「これ以上、恥ずかしい事を言わせないで！」

そんな私に、ザインは言葉で応える代わりに、乳房の上に置いた掌の動きを大きく
してくれる。やがてその手が少しずつ下に降りていき、そして掌がどかされ、剥き出
しとなっている乳房、その上でツンと尖り始めてきた乳首を、ザインは柔らかく唇で
噛んでくれる。

「あっ！」

思わず漏れ出す私の声……そのまま口の中に含まれた乳首に、柔らかな物……ザイ
ンの舌先が触れ、器用に先端を転がすようにされながら愛撫される。

「あっ！ あああ……」

漏れだす喘ぎ声、私の内側から何か……言葉では言い表せない、その何かが身体
の芯から熱く湧きあがってくるのを感じ、私の口から迸り始める。そして同時に頭の
中で、ぐるぐると何か回転を始めるような気がしてくる。

「んっ、んああっ！」

胸から離れたザインの唇が、私の顔に熱いくちづけの雨を降らせながら、貪るように唇を重ね合わせてくる。そしてザインの舌が唇を割って差し込まれ、私の舌と絡み合う……私の口の中に溢れ出した唾液が、ザインの口の中へと流れ込み、同時にザインの口から溢れ出して来た唾液が、私の口の中へと込み、互いに音をたてながら激しく吸い合う。

「はあんっ……んぐうう……はあふう、んっんあっ！」

重ね合わせた唇を通して、頭の中に直接に響いて聞こえてくる激しい口付けの音、淫らと言って良い恥ずかしい音に、私の興奮は高まり口付けは激しさを増して行く

「はあん、んっぐうう……んっあああっ、んむうう……ちゅむんっ！」

淫らな音だと思うけど、その音が私を昂ぶらせる……もっとザインを感じたい、そしてザインに愛されたいと……

「あっ！」

不意に離れるザインの唇、それを追い求めようとした私の視界いっぱい、優しい笑みが映し出される。

「セリア、とっても美味しいよ……」

口の中に溜まった私の唾液、それをゴクリとザインは嚥下する。

「嬉しいい！」

その言葉を聞いた瞬間に、私はザインの首に飛びつく様に縋り付き、激しい口付けをザインへとぶつける。

ザインの口の中に舌を指し込み、激しく絡ませながらザインの唾液を啜り、ザインがしたのと同じように……ゴクリ……と音を立てて嚥下し……言う。

「ザインのも、美味しい……」

私は熱に浮かされたような口調で言い返す。

『……私を愛して……』

ザインは、私を愛していると言ってくれる……

『……好きだと言って……』

ザインは、私を好きだと言ってくれる……

『……もつと強く……』

ザインは、私の胸を強く揉んでくれる……

『……キス……して……』

ザインは、私の唇に自分の唇を重ねてくれる……

『……吸って……舐めて……』

ザインは、胸を……乳首を……舐めて……吸ってくれる……

私の声の中に、何か熱い物が含まれているのはつきりと解る。

そして私を抱きしめたまま、ザインの舌が首筋、胸、乳首、腕、指先、腹、背中、尻ありとあらゆる所を舐めまわしながら愛撫を繰り返し始める……それは優しくもあり、時には荒々しく、愛しむようでありながら、同時に騷るようであり、私の身体を舐め回すザインの舌が千もある様に感じ、私の身体が飴細工か甘い砂糖菓子であるかのように、その全てを舐め尽くすとも言うように、舌の全部を使いながら愛撫を繰り返し続けるザイン……そして、その舌が私の一番敏感な部分に触れ、そこにある小さな肉芽を愛撫する。

「ひあっ！」

ザインの舌の愛撫に、夢うつつとなっていた私の意識が、強烈な刺激によつて不意にはつきりし、奇妙な悲鳴が口が飛び出す。

「あっ、ああああ……ひいうっ！」

私の内側へと、何か柔らかく暖かなモノが、染み込む様に潜り込んでくる。それは、まるで生き物のように蠢き、私に切なくも官能的な喘ぎ声を上げさせ続けた。

「愛して、ねえ愛して……ザインお願い、私を……私の事を……おねがいだから……」

あうっ！ あっああんあーんあっ！」

私は濡れている……私の中から流れ出してくる液体、それが溢れ出し股間を濡らすのを感じ始める……そんな私が恥ずかしく、思わず身体をザインから引き離そうとしてしまうが、ザインの舌はそれを受け止めると、ピチャピチャと音を立てて飲む……

「だめっ、ザイン！ そんな事しないで、汚いから……恥ずかしいから、お願い、おねが……」

私の身体から漏れ出した液体、それを恥ずかしいと感じてしまう。そしてその恥ずかしい液体を舐めるようにしながら音をたて飲むザインに、それを飲むのを止めてくれ様にと哀願する……だがザインは飲むのを止めない

「セリア……いまセリアが出しているのは、女の人が感じた時に出す綺麗な、男を受け入れるための聖なる液体なんだよ、だから俺は嬉しいよ、セリアは俺を受け入れてくれるんだと理解したから……セリア、嬉しいよ」

「でも……だつて、わたし……おんなのっ、こっ……んあっ！ ですもん……あつ、あああ——！ はあく……やあああ——！」

ザインの舌が、さらに私の肉芽を突つくように愛撫し、身体から愛液を溢れ出させ続け、股間へち埋められたザインの顔が、丹念に私の秘密の場所を愛撫する。

「はあっあうんあ……ザイン、ザイン……来て、お願い来て、おねがい……」

私は濡れている……初めての経験に対する軽い恐怖……それよりも強い、ザインを求める私の心と肉体、それが声となりザインを求める。

「セリア……」

私を呼ぶザインの声……すでにザインを受け入れる準備は出来ていた。そしてザインも、私を狂おしいほどに求めているのは、身体に先程から何度も触れてくる……硬く熱い塊の感触により知らされていた。

「あっ！」

私の両足が、ザインの逞しい腕によって大きく開け広げられ、その間にザインの身体が分け入って来る。そして、そのまま私の上に覆い被さりながら、私の濡れている箇所へと硬く……熱くなっているモノを添える。

「セリア……いくよ……」

添えられた熱いモノが、私の内側へとゆつくりと沈み込んで行く……濡れている私の場所、それはザインを受け入れる準備は出来ていたはずであった。

「あくう！」

しかし私の小さな身体は、逞しいザインを受け入れるには不十分であり、激しい痛



みを感じる事は避けられなかった。

「ひいくう、くうはあつ！」

私の肉体を切裂く痛み……さながら刃のないナイフによって、股間から内臓を抜き取られる様な、ビリビリと強引に身体を引き裂かれていくような痛みが、私を襲う。

「いつ、痛い！ お願ひ、もっと優しく、優しくして……お願ひ、ザイン、痛いの……それに、恐いの……」

覚悟していた痛み、だがその痛みは想像以上であり、必死に押さえ込もうとした努力も虚しく、私は苦痛の声を出しザインに哀願してしまう。そして身体を貫くザインの身体から逃れようとするかのように、無意識に身体が摩り上がっていつてしまう。

「セリア、動かないでくれ、力を抜いて……俺に身を任せるんだ。大丈夫……恐くないから、俺にしがみついていてくれ、セリア……おねがいだ」

逃げ出そうとする私の身体が、ザインの腕と身体に阻まれ、再び肉が切裂かれていく痛みが始まる。

「まっ、待って！」

私は思わずザインに哀願する。嫌ではない……それどころか、早く一つになりたいと思っている……しかし、激しい痛みと未知なる恐怖が私に躊躇いの言葉を口に出さ

せる。

「セリア、痛いけど我慢できるか？　もしも……セリアが嫌なら、もう止めるけど……どうする？」

抱きしめられたままの体勢のまま、ザインの戸惑ったような言葉が私の耳元に囁やかれる……

「……」

私ははザインにしがみついたまま無言で頷く、そしてさらにザインに強くしがみつき、きつく目をつむりながら、ザインに身の全てを任せる。両肩にかかるザインの掌の感触、そして引き寄せられるような感覚の後、一気に私の内側へとザインのモノが突き込まれた。

「あぐっ！」

突然の強引とも言えるザインの動きに、私は反応する暇もなく貫かれ、小さな悲鳴をあげる……破瓜の衝撃、そして見開かれた私の視界がグルンと反転し、私の身体が寝転ぶザインの上となり、そのまま身体を抱かかえられる。

「ザイン……どうしたの……？」

貫かれた痛みに耐えながら、急な体位の変化に戸惑い、喘ぎながら問うてしまう。

「ああ、あのままの体勢だと、セリアの背中が痛いんじゃないかと思って……」
確かにザインに組み伏せたままの格好では、ザインと私の体重によって、押し付けられている私の身体に負担がかかってしまう。

「ザイン……」

優しい気遣い、それがセリアには嬉しかった。そして、この人と結ばれる喜び……それを感ずる。

「動くけど……いいか？」

頷く私……そして、私の太腿を抱えるようにしながら、ザインは下から私の身体を突き上げる……

「ひうっ！」

身体を突き上げられる度に、肉体の奥深くにザインのモノが入って行く……肉を切裂かれる痛み、それはまだあるが、私は小さな悲鳴を上げながらも、揺れる身体を押える為に、ザインの厚く逞しい胸へと手を添え、その痛みを耐え続ける。

「あつ……ああああ……動いている……」

私の奥深くへと突き入れられたモノ、それが私の中でゆっくりと動くのを感じる。

私の視線が、私とザインの繋がっている部分へと向かう……私の身体が揺れ動く度

に、繋がった場所から赤いものが垂れ伝い、ザインの下半身を赤く染めて行く、そして私は貫かれる痛みから、ザインの逞しい胸に爪を立て、幾筋もの爪痕を刻み込み続けてしまう。

「くうっ、うっくううっ……」

私の中で動くザイン……それをはつきりと感じた時、私の中で何かが起こる。身体を引き裂かれる痛みは相変わらずあるが、その奥の方に何か痛みとは別の感覚が湧き上がってくる……それは肉体的な物であると同時に、心の奥底から湧きあがってくるような、暖かい安らぐような不思議な感覚……それを感じている最中、不意に私の身体を突き上げるザインの動きが止まる。

「あっ……っ？」

不意に止まったザインの腰の動き、ザインの胸の上に身体を倒れ込ませる私……

「どうしたの……ザイン？」

倒れ込んだまま、座員のほうへと顔を向け私は聞く、そんな私にザインは、優しい微笑みを向け言う。

「いいや……俺ばかり動いていると、セリアがなんか辛そうに見える……俺はこうしてセリアを抱きしめて、セリアの暖かさを感じられているだけで十分に満足だから……」

…

「ザイン……ううん、大丈夫、痛くなんかない……ほんの少ししか、だからもつと動いても我慢できると思うの……でも出来たら優しくして、おねがい……ザイン」

私はザインの胸に顔を押し付けながら、精一杯の声を出し言う……胸に押し当てていた顔が優しく持ち上げられ、私のオデコにザインは優しい口付けをした後に、再び腰を動かし始める……私の中に突き込まれているザインのモノ、それも腰の動きとともに動き始め、私の肉壁を刺激しはじめる。

「くっ！」

痛みが再び強くなり、私は小さな声を出してしまふ……だけど刺激された私の内部は、痛み以外の先程心の奥底で感じられた感覚、それが確かな……言うならば、肉の実感と言う確かな感覚を持って感じられ始めた。

「ひいうっ！ あふう……くふう！」

漏れだす私の喘ぎ声、ザインは私の微妙な変化を見逃さなかった。腰の動きが少しだけ荒々しくなり、それとは逆に私の表情を身体の変化を読み取ろうとするかのようになり、真剣な眼差しで私を見ながら、身体中を刺激し愛撫を繰り返して行く、深く繋がったままの私を抱き寄せ、唇の届く所すべてにキスの雨を降らせ、舌全体を使い身体

を舐めまわしながら、私の小さな乳房をザインの大きな掌が覆い優しく……そして激しく揉み上げつつ、乳首を刺激し指先と舌で執拗に愛撫を繰り返す。

「あんっ……」

私の口から漏れだす声は、苦痛の喘ぎから甘い吐息へと変化して行く……そして、私の内に在るザインのモノが、熱く蠢きながら私を更に刺激し、全てを快感へと変化させて行った……

私の身体は小さくなり、ザインを受け入れている場所へと縮んで行き、私の身体の全てが、その場所と変化して行く……そして、逆のその場所は身体全体へと広がり、その場所から湧き上がってくる快感が、私の身体全体へと広がり、その場所を中心に全てを覆い尽くす。

全身から滲み出し始める汗、そしてザインのモノを受け入れている場所が、自分の意思とは関係なく蠢き、その場所にあるザインのモノを激しく締め付け始める。

「ぐっ！ こ、これは……」

今度は逆にザインが呻く様な声を出し、何かを耐えるような……抗いを示し始める。「いいの……おねがい、来て……私は、あなたを感じたいから……欲しいから……」ザインが何を耐えているのか、それを私は理解し、それを私の中に放って欲しいと

願う……ザインは私を見る……私もザインを見る……ザインが私の身体強く抱きしめ、繋がったままの下半身を、更に深く密着させる。

「あつ！ ああああつ……！！！」

そして、私の内に放たれ染み込んでくるザインの熱い精と思い！ その全てを私は身体の奥深くで優しく受け止めた……

どこからか聞こえてくる微かな虫の音……ザインの胸の上、その場所で私は、眠ったふりをして身体を重ね合わせ続ける。

「セリア……」

私の名を呼ぶザインの優しい声、だけどその声に応えずに、私は眠ったふりをする……もう少しの間、ザインの胸の上でこうしていたいから……

「セリア……」

再び私の名前が呼ばれ、今度は頭の上……私の髪の毛を優しく撫でるザインの掌を感じる……それが、とても心地よく……私は、そのままの姿勢で本当の眠りへと落ちて行く、そしてその中で私は知る……故郷では得る事が出来なかった安らぎ、それがザインの中にあるという事を……

次の日、私とザインはギルガメッシュの酒場で、他のパーティーのメンバーを集う……本来なら、それなりのレベルに達したパーティーのメンバーに加えてもらえれば良いのだが、その様な都合な話がある筈もない、結果として私達はテーブルの一つに陣取り、ギルガメッシュの酒場の室内を見渡し、仲間を探す事となる……ドワーフの戦士、ノームの僧侶や司教、ホビットの盗賊、エルフの魔法使いや戦士、善の戒律の者達もいる、悪の戒律の者達もいる、何の戒律にも所属しない者達もいる、多種多様な種族と職業と戒律の冒険者達がいる。

そして私達は、仲間を集いながら初めてのパーティーを組む事となった……前衛はドワーフ族で中立の戦士であるゴステロとバグー、そして善の戒律の侍であるザイン……後衛はエルフ族で中立の戒律の魔法使いシヴァ（どうやらザインとは顔馴染みらしい）と同じく中立の人族の盗賊スラッシュ、そして善の戒律の僧侶である私……全員レベル1の初めて迷宮に挑戦する冒険者達であった。

そして挑んだ迷宮の地下一階……私達のパーティーは、そこで初めての戦闘を体験し、そして勝利した。

第二章 【壊滅】

六匹のオークとの戦闘は、三匹を倒し残りは逃げ去った。パーティーの損害は、ザインが腕を負傷しただけであり、それもセリアのディオスにより完治している。状況を見るならば、まだ迷宮の探査を続行する事は可能であろう。

「どうしますか？ ザイン、探査を続行しますか？ それとも冒険者の宿に戻りますか？」

シヴァがザインに聞く、暫し考えた末にザインは帰還を主張し、ほかの者達もそれに同意する事となった。

「しかし、なんだな、以外と楽な戦闘だったな」

「ああ……そうだな、ザインもそう思わんか？」

バグーとゴステロの二人が、先ほどの戦闘の事を話している。話しかけられたザインが振り向きながら言う。

「たまたまだ、何時もこうだとは限らんさ？！ バグー！ ゴステロ！ 逃げろ！」

振りかえったザインの眼に、音も無く空間を歪めながら出現してくる巨大な影がうつり、その影が歪めた空間から巨大な足が突き出でる……そして、その足先にはゴステロがいた。

「えっ？　がっあ！！」

「なっ？」

反応する間もなくゴステロが踏み潰される。バグーは何が起こったのか把握できなかった。今まで隣で話をしていたゴステロが、何か巨大なものに踏み潰された……いや、踏み潰されたと言う事すら理解しなかった。いままでゴステロがいた場所に巨大な物体が突然に出現したのだ、バグーが最後の瞬間に理解したのはそれだけであった。

出現した影が手を振り下ろし、呆然としているバグーを虫けらのように弾き飛ばす。バグーは壁に激突し、血をこびり付かせ肉塊と化す……即死である事は間違ようがなかった。

突如として出現した影が、ゆっくりとその全身を現す……ゴステロの屍を踏み潰しながら邪悪な瘴気を発散させつつ、影は形を作り上げて行く……凍りついたように、生き残っている者達が、それを凝視する……誰一人として動けなかった……その影か

ら発散する強烈な邪気、それが彼らを縛り付ける。

「ザ……ザイン……ザイン」

震えながらも、セリアがザインの腕にしがみつく……ザインは恐怖に震えるセリアを感じる。

(セリア……)

セリアを感じた瞬間、ザインは影の呪縛を解き放たれた。ザインはセリアをシヴァの方に突き飛ばしながら、叫ぶ！

「逃げろ、シヴァ！ セリアとスラツシュを連れて逃げるんだ！」

その言葉を聞いた瞬間、シヴァも呪縛が解ける。シヴァは、何も言わずにセリアの腕を掴み、抱え上げるようにして迷宮の出口へと後退して行く、スラツシュもそれに従い後退して行く

「いや、ザイン！ ザイン！」

セリアはザインの名を呼ぶ、ザインはそれに応えることなく正面に出現した影……いや、もはや影ではなく、本来の姿を現した悪魔王マイルフィクス……を、凝視する。『クカカカッ……』

低い、人以外の者が発する声でマイルフィクスが笑う……目の前にいるムシケラを

どのようにしてやろうかと、その邪悪な思考をめぐらせながら



「ザイン！ ザイン！」

半狂乱でザインの名を呼び続けるセリアを抱きかかえながら、自分は迷宮の中を、出口へと目指してひた走る。

「放してえ、ザインが、ザインの所に戻らなくちゃ！」

叫び続けるセリア……だが自分は理解していた。ザインがセリアを逃がすために残った事を、だから自分は生残ったセリアとスラッシュと共に、ひた走り続ける。

しかし……どうして？ 出現したのは、かなり高レベルの悪魔、それが影の正体であらう事は想像がついた。何故？ そのような高レベルの悪魔が、本来なら出現する筈の無い迷宮の浅い階に出現したのか？ 理由はわからない、しかし現実に出現して、戦士のバグーとゴステロを瞬時に葬り去った。

勝てるはずは無い、逃げ出す事すら至難であったろう。奇跡的に、こうして逃げ出せたのはザインが囷となり、悪魔の引きつけてくれたからである事は確かであった。

「ギャ——！！！」

前方を走っていたスラッシュが悲鳴を上げ、その場に倒れ込む、暗闇の先には、オークが現れた。

「チィ！」

オークの数は三匹……先ほどの戦闘時に、逃げ去ったオークであろうか？ 倒れ込んでいるスラッシュが這いずりながら、こちらに戻ってこようとするが、オークの一匹が目ざとく、それを見つけると手に持った錆びた剣をスラッシュに叩き込み止めを刺す。

「キヤーー！」

セリアが悲鳴を上げる。その悲鳴を合図にするかのように戦闘は始まった。

「ハルト！（小火球）」

魔法使いレベル1の攻撃魔法、小さな火球を相手にぶつけるといふ攻撃であり、一番早く唱える事が出来る呪文でもあった。

「グギャラァー！」

生み出された火球がスラッシュに止めを刺したオークを直撃し、悲鳴を上げて仰け反り倒れるオークだが、そのオークを無視して、他のオークが素早く間合いを詰めて

来る。下がりながら今度はカティノの呪文を唱えようとするが、間に合わずオークの一撃を食らってしまう。

「ぐう！」

鈍い痛みが、呪文の詠唱を中断させ、無防備な姿をオークの前に曝け出す。

守らなければ……その思いが在った。親友であるザインに託されたセリア、せめて彼女だけでも守らなければ、ザインに合わせる顔が無い……はたして非力な魔法使いに、如何程の抵抗が可能か不明ではあるが、向かってくるオークに体当たりして、時間を稼ぐ事ができれば、その間にセリアが逃がす事ができるかもしれない……

「くっ！」

自分に向かってくるオークが持っている錆びた剣、その振り上げた剣を避ける事せず、逆にオークに向かって走る！

だがオークの錆びた剣が、頭上へと振り下ろされる直前、突如としてオークの動きが止まる。

何事が起こったのか、振り向いた目に写ったのは、巻物の魔力を解放したセリアの姿であった。

巻物に封じ込められていたカティノの魔力が解放され、襲いかかってきたオークは、

他のオークと共に、その場で眠りと陥った。

★ ☆ ★

大急ぎで盗賊のスラッシュの肢体を引きずりながら、私とシバアはその場から逃げ出す。

「シヴァ……いま、ディオスを」

幾つかの回廊を回り、危険が無いと判断できる場所で、私は負傷しているシヴァにディオスの呪文を唱える。傷口が癒えて行く……しかし、完全には癒えない、もう一度呪文を唱えようとしたが、私のマジックポイントは尽きていた。

「シヴァ、一人で地上まで戻れる？」

「セリア何を……まさか、戻るつもりでは！」

「ごめんなさい……でも……わたし……」

そのまま私は、来た道を引き返す。

「セリア！ やめなさい、無駄です！ ザインの気持ちが無にしているのですか！ セリア！」

解っている……言われなくて私は知っている。

なんでザインが、一人だけ残ったのかを……だけど……わたしは……

シヴァの声を後ろに、私は迷宮の闇の中に再び入り込んで行く……その先に、己の死しかない事を知りつつも……ザインの姿を求めて……

★ ☆ ★

それは、絶対的な恐怖であった。

目の前に存在するモノに対する、生命の根源から湧きあがる恐怖……逃げ出したかった……悲鳴を上げたかった……この恐怖から逃れられるのなら、己を殺す事すら厭わないと言う思いすら湧いてくる。しかしそれは出来ない、恐怖により支配されかかった精神の中、微笑を浮かべるエルフの少女の姿が思い出される。

「セリア」

震える唇にその少女の名を呼ぶ、小さなセリア……可愛いセリア……愛しいセリア……それは彼にとつて自分以上の全てであった。

セリアが逃げ切るまで時間を少しでも稼ぐ、それが今の自分に出来る事である。

目の前の怪物に対して、勝負がないのは明白であり、こうして対峙しているだけでも体力、気力ともにゴソリと失われていくのがわかる。

『\$& , ○ w p 》 , &% ~ ? ¥ 0 9 ……』

目の前の怪物が呪文を詠唱し始める。聞き覚えのない呪文……しかし魔法使いの素質を持ちうる侍のザインには、その呪文が何と言う物であるかを知る事が出来、その呪文の持つ破壊力を理解した……爆炎（テイルトウエイト）魔法レベル7、最大にして最悪の破壊力を持つ死の呪文が、ゆっくりと詠唱されているのだ。

「くっ……!!」

今の自分には爆炎（テイルトウエイト）に耐えうる術も体力も無い、ならば詠唱され切る前に一撃を与え詠唱を中断させねば、確実な死が残されるのみである。死ぬことは覚悟してたが、ただセリアを少しでも遠くに逃がすためには時間を稼いだかった。恐怖に脅え動かない身体と心で、ザインはセリアの事を考える。抱きしめた華奢なセリアの身体、その柔らかな唇と小さな乳房、熱い蜜壺の感触とセリアの甘い声、そしてセリアの優しい顔が俺の方を向き、唇が自分の名を呼ぶ……

『……私を愛して……』

指先が、ピクリと動く……

『……好きだと言って……』

固まっていた肉体が、動かせるようになる……

『……もっと強く……』

剣を持つ手に力を入れる事が出来る……

『……キス……して……』

萎えかけた気力が、再び身体に充滿し始める……

『……吸って……舐めて……』

眼前の悪魔を俺は見据える……

『ザイン……すき……』

俺は、全てを振り絞り悪魔に向かい跳躍した！

「チェスタアアー！」

裂帛の気合と共に、剣を振りかぶりつつ俺は悪魔に突っ込む！

呪文を詠唱しながら、五月蠅そうに悪魔が、蠅でもい払うような緩慢な動作で、その豪腕を横薙ぎにして、俺を跳ね飛ばそうとした。

奇跡か？ 偶然か？ 俺は、巨大な悪魔の腕をかくぐり、渾身の一撃を悪魔の身

体に叩きつける事に成功した！

しかし……もしも俺がマスターレベルの侍であったなら、俺が持つ剣がムラマザブレードであったならば、それは致命的な一撃として、悪魔を葬り去ったかも知れない、だが現実には、俺はレベル1の侍でしかなく、持っている剣もごくありきたりの剣でしかなく、結果として悪魔に与えた一撃は、その身体にかすり傷程度のダメージしか与えることしかできなかった。

「へへへ……これでも上等かな……」

それでも多少は満足した……強大な悪魔に対して、一矢報いる事が出来た事を、そしてセリアを逃がす時を稼げた事を……

それは激しい怒りの感情であった。気にもとめていなかった虫ケラに傷を負わされた事が、悪魔王マイルフィックスのプライドを深く傷つける。怒りは呪文の詠唱を早め、ザインが一撃を加えて、崩れた態勢を立て直し再びマイルフィックスと対峙した瞬間！完成された呪文が解き放たれた！

『爆炎！（テイルトウエイト）』

「！」

鋼鉄すら溶け切る爆炎の中、その最後の瞬間にザインは、自分を呼ぶセリアの声を聞いたような気がした……



息を切らしてセリアは駆ける。

(ザイン！ ザイン無事でいて……おねがい！)

迷宮の回廊を何度も周り、ザインと別れた場所にあと少しまで辿りつく

「ザインー！」

セリアはザインの名を叫ぶ！ それと、ほとんど同時に、強烈な熱気と轟音が巻き起こる。

「きゃっ！」

爆風の余波がセリアを吹き飛ばす。吹き飛ばされたセリアが、よろめきながら立ちあがり、そしてふらつきながらも、回廊を曲がったセリアの目の前に無惨な光景が剥き出しにされた。

ゆらめく熱気の中、そそり立つように存在している悪魔王マイルフィクスの姿と、

その足元で、ほとんど炭化して黒い塊と化している物体……それは愛する者に対する直感であったのかもしれない、しかし信じたくなかった。その黒い塊がザインの変わり果てた姿である事を……

「ザイン、ザイン……ザイン——！」

マイルフィックスの存在など眼中に無かった。ザインに少しでも近寄りたかった。マイルフィックスの前に飛び出すようにして、セリアは急ぎ足でザインの屍に駆けよる。

「ザイン……」

まだブスブスと燻るザインの屍、溶けた鎧が炭化した肉体に絡み付いている。かうじて人の形を保っている屍の前にセリアは座りこむ、そんなセリアをマイルフオクスが見下ろす。

【オモシロイ……】

そうマイルフィックスは思った。悪魔族がこの世界に存在する……そして存在できる理由、それは人の持つ負の感情ゆえと言えた。欲望、恐怖、悲しみ……それらの負の感情が、悪魔族の糧と言えた。それは悪魔王たるマイルフィクスも例外ではない

【コノムスメノカンジョウハ……ビミダ……】

先ほど屠った男の持っていた感情……恐怖と絶望……それ以上にセリアの哀しみの、

愛する者を失った感情は甘美であり美味であった。

『ムスメ……ソノオトコヲイキカエラセタイカ……？』

セリアの頭に直接マイルフィクスの意味が呼びかける。

「えっ？」

振り向くセリアの視界にマイルフィクスが立っていた。意図的に自らの身体から湧き出す瘴気を抑え（とは言え、それでも並の人には耐えられない、冒険者でなければ耐える事が不可能なレベルの瘴気は湧き出していたが）語りかけてくる…

第三章 【 凌辱 】

「くっうう……かはっ！ああつ、うっああ……」

地下……迷宮の闇の中に女の喘ぎ声が広がり、そして闇の中に消えていく……

地下迷宮の一角で、女……と言うよりも少女と言つてよいエルフが嬲られている。

少女を嬲っているのは悪魔王マイルフィクスとオークが2匹、ほとんどの装備を引き剥かれ、ほぼ全裸にされたエルフのセリアの足を、マイルフィクスはその歪な両腕によつて押し広げ、股間を剥き出しにさせている。

剥き出しにされているセリアの股間、その上に曝されているマイルフィクスの巨大なペニス、その先端からこぼれ出してくる白濁した液が、ボタボタとセリアの腹の上へと滴り落ちて行く……

「ああっ……いやっ！ いや、いやああ……」

腹の上に垂れてくる生暖かくもおぞましい感触、恐怖と嫌悪……セリアは、呻く様な声で哀願の声を漏らしながら弱々しく手を動かして抵抗をする。



「ぐぶうう、るぎゆるるうつつ……」

二匹のオーク達が、そんなセリアの手を抑えこみながら剥き出しになっている薄い乳房に舌を這わせながら噛みつき、互いに争う様にしながら蹴りまわす。

「あうっ！」

苦痛の声を出すセリアの身体がビクンッ！ と跳ね、腹に滴っていた濁液が股間と顔の方へと流れて行く、伝い流れる濁液の感触……そして、マイルフィクススのペニスがセリアの秘所を蹴る。ズリズリと秘所の上を割目に添いながらペニスが蠢く、節くれだった異形のペニスが刺激を与え続ける……けして快感ではないおぞましい刺激を……

「ザ……イン……」

セリアが小さな声で愛しい人の名を呼ぶ、蹴られ続けるセリアの視線の先には、ほとんど炭化して消し炭と化したザインの屍が転がっていた。





試読体験版は

これで終了です。

本編の続きは

製品版にて

お楽しみください

